

# 金沢文庫蔵『見性成仏論』と伝達磨大師『血脈論』

——「見性」の思想に着目して——

古 瀬 珠 水

はじめに

達磨宗及び大日房能忍の歴史的研究は、名古屋市真福寺に於ける新たに発見などもあり、進みつつある。しかし、それらの思想内容については、史料に断片的にしか記されておらず、未だ明らかになっていないと言ひ難い。金沢文庫蔵『見性成仏論』についても、達磨宗との関係があるとは言われてきたが、その内容が詳しく研究されてこなかった為、「達磨宗によるテキスト」と断言するには至っていない。

『血脈論』は、伝達磨大師三論、あるいは少室六門の一書として知られているが、その作成者などは判っていない。『血脈論』と達磨宗の関わりは、経豪の『正法眼蔵御聞書抄』第二十四、画餅に「達磨宗ニハ破相論悟性論血脈論トタテ、マツ世間ノ法ヲ破シテ、正ヲサトルト云ハ、ステニ測度ナルヘシ。」<sup>(1)</sup>とあり、『正法眼蔵御聞書抄』が作成された一三〇三年から一三〇八年頃に達磨宗が伝達磨大師三論を重

んじていたことが伺われる。そこで、もし、『見性成仏論』が達磨宗によるテキストであるとするならば、その根拠の一つを『血脈論』に求めることができる<sup>(2)</sup>と考える。尚、既に拙稿にて指摘したが、『見性成仏論』には『悟性論』（『見性成仏論』には語性論と書かれる）からの一文の引用があるが、『血脈論』及び『破相論』からの引用は見られない。

本論考では、『見性成仏論』と『血脈論』の「見性」に関する思想を比較し、両者の思想的関連について考察を試み、『見性成仏論』が『血脈論』を拠り所にしていたかどうかを論じる。その結果、『見性成仏論』が達磨宗によるもの<sup>(3)</sup>かを考察する。

## 一 「見性」のことばの使い方について

『血脈論』には全体を通じ「見性」と「不見性」と条件を設定し、対の形をとって、見性する重要性を述べている。主な二例を挙げてみる。

① 「若見性即是仏。不見性即是衆生」<sup>(4)</sup>

② 「成仏須是見性。若不見性。因果等語是外道法。」<sup>(5)</sup>

以上の如く、「もし見性すれば仏」、「もし見性しなければ衆生」あるいは「成仏は見性」、「もし見性しなければ外道法」であるとする内容は極めて直截的、断定的である。しかも、この「見性する」と「見性しない」を対にして、両者を比較しながら説いている。「見性する」と「見性しない」はまるで団扇の裏表のようで、くるりと回せば一気に「見性しない」から「見性する」に変わることができるようである。言うなれば、「見性」の世界がすぐ近くにあり、心ひとつ変われば覚れることを示している。<sup>(6)</sup> 先行研究の関口真大氏が『達摩大師の研究』の中で「『血脈論』はもっぱら見性の一義を説き内容的にはむしろ見性論と名づけられてしかるべき」と述べたことに、筆者は、全く同意見である。

一方、金沢文庫蔵『見性成仏論』は「見性成仏」の表題がついているが、実際に「見性」のことが使われているのは次の五箇所である。(筆者訓読。傍線筆者)

① 「見性の人は、生死の生滅をも見ず、涅槃の生滅をも見ず、  
 と言う〔へ〕ども、未達の輩はいかでか是を厭ひ、是を願  
 はざらむ。」(一七八頁上)

② 「問(て)曰(く)善悪東西異にして因果は胡越に隔てたり。  
 何ぞ見性の力直ちにこれを一心なりと悟りて、差別無しと

言へるや。」(一九二頁上)

③ 「真に見性の人にあらずば、何ぞ、邪山にあたりて、正海  
 を見む。」(一九四頁下)

④ 「問(て)曰く見性の人(は)心をさとりて□(ま)よひを離れ  
 ずや、如何。答(へて)曰(く)見性の人(は)迷ひをも離れず、  
 さとりをも経ざるなり。」(一九六頁上)

『見性成仏論』で使われる「見性」の意味は、「人」や「力」にかかる形容詞的な使い方であり、『血脈論』で使われるような「見性すべし」などの動詞的な強い意味ではない。更に、『見性成仏論』では、『血脈論』にある「見性すべし」、「見性せずんば」のことは見られず、全体を通じて「見性」のことは自体には、重要な意味を持っていないことが解る。また、『見性成仏論』では「見性」と「成仏」が一連のことばとして使われず、『血脈論』の「見性」と「成仏」を極めて接近するものとみなす。

## 二 『血脈論』の「本性」と『見性成仏論』の「心性」

『血脈論』には「見性」とは別に「本性」ということばもあり、「本性を見る」ことが禪<sup>(8)</sup>と言う。「本性を見る」とは「物事の根源的な本質を見る」と言う意味であり、「見性する」と同じ意味と考えられる。そして、禪の本意が「本性を見る」であると端的に述べている。『見性成仏論』では、『血脈論』

の「本性」に替わり「心性」が重要な意味を持つ。「心性」について述べた部分を抜き出してみよう。（傍線筆者）

次に仏心宗はただちに心性をさとり、知覚をあらはす（を）詮とす。（中略）智者は心性を悟るといふこと真なるかなや。上諸仏より下螻蟻に至るまで心性を離れ、知覚のほかにあるものにはあらず。（一八三頁上—一八四頁上）

「心性」は清浄なる心の世界の意味であり、その心を得ることが禅宗の最も大事な点であることを説いている。『見性成仏論』では、禅宗のことを仏心宗とも言っているが、この部分の前は、「教」について詳しく述べている。つまり、ここでは、禅宗以外の宗派が、経論や修行によりさとりに近づこうとしていることを批判し、「心性」をさとることが、禅宗の目的であることを何よりも強調して述べている。『血脈論』の「本性をみる」と『見性成仏論』の「心性をさとる」は、どちらも禅の真髄として考えている点は共通と言えよう。しかし、その方法は『血脈論』においては、実に直接的、短絡的であるが、『見性成仏論』においては、譬喩などを使い、説明的な言い方になっている。

ところで、『見性成仏論』では題名が「見性成仏」であるが、実際は、「教外別伝」、特に天台宗との違いについて紙面の多くが割かれ、残りが「不立文字」などについて述べられている。次のような一文もある。

禅宗、これ大小両乗の他において、権実二宗のうちにあらず。故に、教外の別伝、不立文字の宗（と）名づく。（一八一頁上）

関口真大氏が「『血脈論』は見性論と名づけられてしかるべき」と提示したことに関連するならば、『見性成仏論』は教外別伝論、とでも改題したほうがよいかも知れない。

### 三 頓悟について

『血脈論』では「見性」に至るまでのプロセスやその意義については、先に挙げたように、「見性」と「成仏」は接近して一つの括りの中にあることを前提に説法している。一方、『見性成仏論』にも、「衆生是心即仏」と説いている箇所がある。（傍線筆者）

答（て）曰（く）、舟走れば、岸移り、雲捌けば、月運ぶ。移ると見ゆる岸のほか、移らざる岸は無し。運ぶと見ゆる月、離れて運ばざる月無し。唯、移ると見えつる岸の移らざる岸にてはあり。運ぶと見えつる月、運ばざる月ありけるなり。この喩ひを持ちて心得べし。意識の舟走れば、菩提の彼岸も移るに似たり。无明の雲騒がしければ、本覚の朗月も運ぶに相同じ。身離れてありと思へる菩提の外に、身を離れざる菩提は無し。離れたりと思へる菩提の離れざる菩提にてはありけるなり。心ほかにありと思へる本覚を離れて心あるにはあらず。ほかにありと思へる本覚の離れざる本覚（を）（の）ありけるなり。真に舟留まりぬれば、移らざりけりと知り、雲晴れぬれば運ばざりけりと、ときとりぬ。意識（の）舟たちまちに留まり、无明の雲、俄かに晴れぬれば、菩

提の覚岸不変不動にして、本覚の円月は、无去无来なり。哀れなるかなや、未知未見の凡夫。悲しきかなや、未了未達（は）衆生是心即仏の談をば遠く聖者に譲り、即身菩提の説をば遙かに凡倫隔てること眼、若し睡ざれば、諸の夢、自づから除きぬ。（一七八頁上—一七九頁上）

上記の如く、「本覚」についての（恐らく『起信論』の始覚と本覚の考え方に基づいていると思われる）説明を、喩えなどを使い、じっくり説いている点が『血脈論』とは大きく違う。『見性成仏論』では、別の箇所<sup>(9)</sup>で教について述べた部分と比較し、段階的に行っていた修行による漸悟を払拭し、新しい考え方、つまり「心性をさとり」、頓悟する禅の考え方の内容を噛み砕いて説いているようだ。『血脈論』が既に語られていると思われる、見性成仏や頓悟の考え方を熟知し、それを端的にまとめたのに対し、『見性成仏論』では、さまざまなことばを馳駆して丁寧に説いていることが理解できる。表現が断定的にならない点も『見性成仏論』の特徴かと考えられる。

以上により、「見性」に対する関わり方が、『見性成仏論』と『血脈論』では違いがあることが明らかになった。経豪が言うように達磨宗が『血脈論』を「拠り所」にしていたように、『見性成仏論』が『血脈論』を必ずしも重んじていたとは考え難い。また、『見性成仏論』には『血脈論』からの引用文がないことも、両者の関係が深くないことを物語っている。従って、『血脈論』を「タテ、」いた達磨宗と『見性成

仏論』の間には、「見性」に対する一致した考え方がみられず、『見性成仏論』は達磨宗によるもの」とする従来の考え方に疑問を投げかけるものである。

- 1 『曹洞宗全書』註解（曹洞宗全書刊行會、一九七〇年）五二三頁下—五二四頁上。
- 2 古瀬珠水『見性成仏論』の基本的性格に関する「考察」（『仙石山論集』四号、二〇〇九年）。
- 3 『見性成仏論』は金沢文庫より入手した原本の電子コピー及び『金沢文庫資料全書 仏典第一巻禅籍篇』に収められている『見性成仏論』の翻刻をもとに、読みやすいように、漢字と平仮名に置き換えた。また、『血脈論』は『大正新修大藏經』に依った。
- 4 『大正蔵』四八巻、三七四上。
- 5 同上。
- 6 この「見性せば」、「見性せずんば」と対にして説法する方法は、鎌倉末期、臨済宗法燈派の抜隊得勝による仮名法語『塩山和泥合水集』にも見られ、その「見性」の思想は『血脈論』に極めて近いと考えられる。
- 7 関口真大『達磨大師の研究』（彰國社、一九五七年）二二頁。
- 8 『大正蔵』四八巻、三七五上。
- 9 『見性成仏論』、一八一頁上—一八三頁上。

〈キーワード〉 『見性成仏論』、『血脈論』、見性、達磨宗、経豪  
（国際仏教学大学院大学）